

たじみん昼話 120

質問がないのは、授業を受けていないのと同義?

多治見高校の教育は深い思考に基づく学びの実践だ。それは、「教えられた知識は、自らの思考を通過しなければ身につかない」と考えるからだ。

学習指導のポイントは自発だ。

押し付けられた教育によっても学力は伸びるだろう。しかし、将来の進路である大学や社会では、課題は与えられても答えを与えられることは少ない。そのような場面に生徒が相対したときに、困惑せず確実に対応ができるようにするには、教え過ぎないことにより「自発的な考える力」を育てるしかない。多治見高校は考えている。だから授業において、簡単に結論や答えを教えないのだ。

ただし、答えを与えすぎるのは不可とするが、待機する時間にも限りがある。また待機するだけでは、教師としての存在意義と生徒が登校した意味もないので、教師はこの教育の意義を具現するため、生徒に問いを投げかける。この問いは、生徒が深く考えざるをえない問いだ。

思考はトライ&エラーを繰り返しながら、自分としてベターな解答を紡ぎ出すことが重要だ。何度も失敗しながら修正を繰り返すことで、徐々に自分の考えが深まるからだ。

ホワイトボードをただ眺めて板書をしてメモをする。それだけでは多治見高校の授業を受講したことにはならない。

自分は多治見高校の授業を受講したな、というのは、「今の教材に対して、私はこう考える」、「こうなるはずだが、何がずれているのだろう。」となって、初めて受講したということになるのだ。

だから、ノートは毎回疑問だらけのメモで埋め尽くされ、生徒はその疑問を解消するヒントを求めて、教師を訪ねることが必要なのだ。このルーチンこそが、生徒と教師の思考を深める教育の本質なのだ。